

## 加賀藩洋書の総合的研究

著者	板垣 英治
発行年	2015-12-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/48373">http://hdl.handle.net/2297/48373</a>

# 加賀藩洋書の総合的研究

板垣英治

## 序文にかえて

加賀藩は第五代藩主前田綱紀の代（1643—1724）より学門を奨励・精通して多くの書籍の購入と蒐集が始まった。さらに第十一代藩主前田治脩の時代の寛政四年（1792）には藩士の文武の教育を目指して、加賀藩・藩校が創設されて「明倫堂」は文学学校とし、「経武館」は武学校として藩士の子弟の教育に担った。明治初年の調査によれば、和漢書約一万四千点が、洋書約一千点が収蔵されていた。始めこれらの書籍は石川県に引き継がれたが、明治初期に和漢書は東京の財団法人前田育徳会「尊経閣文庫」に移されて収蔵されてきた。

一方、洋書は石川県立図書館、第四高等学校図書館を経て金沢大学附属図書館、旧第一中学校を経て泉丘高等学校図書館、そして歴史博物館成巽閣等に分散して架蔵されてきた。著者の調査後に県立図書館内の特殊文庫「藩学校蔵書」に約百点が架蔵され、さらに金沢大学附属図書館本館および医学部分館の貴重書室に語学関係書および医学関係書が架蔵されている。

これらの書籍の調査・研究から始まった『加賀藩旧蔵洋書目録』の編輯・出版が平成十八年に金沢大学附属資料館で行われ、八百点に余る書籍の整理が完了した。これらの書籍についての学問的研究と相まって、加賀藩の関係機関での洋書の使用の様子も明らかになってきた。

特に加賀藩の西洋医学の導入は、文久二年に壮猶館での黒川良安を中心として蘭学・生理学書の会読に始まり、ついで種痘所、卯辰

山養生所、加賀藩医学館、金沢医学校、金沢病院へと受けつがれて拡大し、架蔵した洋医学書も増加してきた。その医学書の使用の実態もこの程の調査で明かになってきたと同時に驚くべき収穫も生まれた。

わが国の化学史では従来、大坂舎密局でのハラタマとリッテルの化学講義が近代化学の始まりとされてきたが、加賀藩医学館でのP. A. J. スロイスの「舎密学講義」が当に近代化学の最初の講義であることが証明された。また、彼の動物学講義を翻訳して太田美農里が出版した『斯魯以斯講義 官許 動物学』（石川県学校蔵梓、明治七年）はわが国最初の「動物学」のタイトルを持つ書籍であった。

本書は筆者が金沢大学を定年退官後（2000年）から平成二十七年までに刊行した論文の散逸を防ぐために、取りまとめたものである。書籍のタイトルは『加賀藩洋書の総合的研究』としたが、内容は第一章には加賀藩医学館でのオランダ医学の教育であり、第一部では北陸医史学会誌『北陸医史』に掲載した医学教育関連論文をまとめ、第二部では化学史学会誌『化学史研究』および金沢大学日本海域研究センターの学術誌『日本海域研究』に掲載された論文を取りまとめた。

第二章には加賀藩旧蔵洋書の調査・研究の成果を記載した論文をまとめた。第一部に壮猶館蔵書、卯辰山養生所の洋書、加賀藩旧蔵洋書の目録の作成について、さらに加賀藩の和蘭語辭書について記した論文をまとめた。第二部に加賀藩の稀覯書について記載した。論文の縦書き型式のものは前半にまとめ、横書き型式のものは後半部にまとめて掲載した。

加賀藩旧蔵洋書は、始めは長崎に輸入される和蘭書が中心であり、多くの書籍には「長崎東衙官許」の印影の残るものである。この中には多くの稀覯書が含まれていた。たとえばレーゼル『昆虫図譜』全8冊は1750年代に和蘭で出版された彩色画の昆虫図が掲載された書籍であり、本学図書館に架蔵されるものが本邦唯一のものである。

村上義茂（英俊）著『舍密明原』は松代藩で佐久間象山の命でベルゼリウス『化学提要』仏語版から雷酸関係事項を抜き書き編輯・翻訳した書籍である。本書は黒川良安と佐久間象山が親密な関係にあったことから、特別に加賀藩壮猶館に贈られた書籍である。ベルゼリウス『化学提要』の和蘭語版は壮猶館にも購入・架蔵されていた。此の書物が村上の第一作であり、その後、彼は仏語をわが国に紹介するために努力した人物であり、『フランス学』での最高功勞者である。また、芝木昌之進『ハルレー地球万国史』はわが国の『英学』の上で大きな貢献をした書籍である。

本書の編集にあたり、学会誌にサイズの違いがあるために、総てをA4版に統一した。数点の論文にはカラー印刷もされていたが、総て白黒印刷とした。その代わりに、レーゼルの『昆虫図譜』から数点のカラー図を挿入頁に掲載した。

本書に掲載した諸論文が基となり『金沢大学医学部創立百五十周年記念誌』（平成二十四年刊）の第一章から第五章の通史の項目の記述が行われた。さらに金沢大学資料館紀要・創基一五〇年記念別冊『金沢大学の淵源』の執筆も行ったことを付記する。日本海域研究に掲載してきた「加賀藩の火薬」関係の論文一一編はまとめて論

文集『加賀藩の火薬』として、昨年石川県立図書館に寄贈した。

最後に金沢大学附属図書館、同附属資料館、同附属医学部図書館、石川県立図書館、金沢市立玉川図書館・近世史料館、公益財団法人成巽閣等の担当職員の方々から多くのご支援とご教授をいただきました事に、この場を借りて深謝します

平成二十七年 傘寿を記念して、

板垣 英治

序文にかえて

目次

第一章 加賀藩の西洋医学

第一部 スロイスとホルトルマンの医学教育

1	加賀の西洋医学の系譜	北陸医史	第三一号（平成二二年）	1
2	スロイスとホルトルマンの最新化学の講義	北陸医史	第二六号（平成一七年）	22
3	スロイスの「水の系統分析」講義・「薬剤学」3附録 水検査論 藤本純吉筆記、 「処剤規則、贗造試験、水検査法」 稲坂謙吉筆記	北陸医史	第二七号（平成一八年）	27
4	スロイス究理学・光学で講義された日光顕微鏡について	北陸医史	第三五号（平成二五年）	37
5	スロイスの講義から 植物学講義とオーデマン植物図鑑の関係	北陸医史	第二七号（平成一八年）	42
6	「スロイス方聚」スロイスの調剤処方箋	北陸医史	第三四号（平成二四年）	48
7	スロイス薬剤学に記載された生物由来の有効成分	北陸医史	第三三号（平成二三年）	56
8	Glandula Pituitaria『脳下垂体』について スロイス「解剖学」の講義録から	北陸医史	第三七号（平成二七年）	69
9	「遺伝学」この学術語のルーツをさぐる	北陸医史	第三三三号（平成二三年）	76
10	「甘硝石精」とは	北陸医史	第三四号（平成二四年）	92
11	「ローレッツ氏方叢」の薬剤処方方の解説	北陸医史	第三七号（平成二七年）	97
12	藤本純吉の蒐集した加賀藩医学館関係者の写真について	北陸医史	第三六号（平成二六年）	107
13	加賀藩医学館に関係した新史料	北陸医史	第三六号（平成二六年）	123
14	明治初期の金沢での薬学教育	北陸医史	第三二二号（平成二二年）	141



第二部 近代科学の教育

15	P. J. スロイス 近代化学のあけぼのをもたらした来日オランダ人医師『含密性現象ハ必ズ「モルキュレ」ノ「フォリウムレ」ヲ以テ徴スベシ』	化学史研究 第二九号 (平成一四年)	205
16	明治四年に金沢藩御雇蘭人医師、P. J. スロイスが行った化学講義	日本海域研究 第三四号 (平成一五年)	216
17	第四高等学校物理学科の分光器と明治四年にスロイスが「含密学」、「究理学」で講義した分光器	金沢大学資料館紀要第三号 (平成一五年)	231
18	金沢藩御雇蘭人 P. J. スロイスの「究理学」講義 特に「エレキ論」と「マク子ト論」から	日本海域研究 第三五号 (平成一六年)	246
19	スロイス動物学講義とD. Lubachの『動物学入門』	日本海域研究 第三九号 (平成二〇年)	266
20	水の系統的定性分析法 A. C. ホルトルマンの「実験化学」講義 藤本純吉筆記講義録から	日本海域研究 第三七号 (平成一八年)	282
21	オランダ人医師 A. C. ホルトルマンの有機化学講義1. 有機化学	化学史研究 第三一号 (平成一六年)	299
22	オランダ人医師 A. C. ホルトルマンの有機化学講義2. 生化学、発酵化学、タンパク化学	化学史研究 第三一号 (平成一六年)	312

第二章 加賀藩の洋書

第一部 洋書 A

23	壮猶館蔵書目録	北陸史学 第五八号 (平成二三年)	151
24	壮猶館、卯辰山養生所、医学館の医学洋書	北陸医史 第二八号 (平成一九年)	159
25	第一部 洋書 B	金沢大学資料館紀要第三号 (平成一五年)	324
26	加賀藩の洋学に貢献した和蘭語辞書		
	加賀藩旧蔵洋書の目録作成		
	壮猶館旧蔵洋書目録、卯辰山養生所旧蔵洋書目録、金沢医学館旧蔵洋書目録、		
	加州軍艦所旧蔵洋書目録、加州弾薬所旧蔵洋書目録、加州海軍局文庫旧蔵洋書目録、		
	および藩校「学校」旧蔵洋書目録と金沢学校旧蔵洋書目録、		
	附録 石川県勸業博物館時代の蘭書目録	日本海域研究 第三八号 (平成一九年)	353

第二部 稀観書 A

27	August Johann Rösel von Rosenhof, DE NATUURLYKE DER INSECTEN, レーゼル著 クリーマン編訳 「昆虫の自然史」について	日本海域研究 第四三号 (平成二四年)	399
28	村上義茂訳著「含密明原」とその原点、ヘルゼリウス著仏訳『化学提要』 J. J. Berzelius, Traité de Chimie Minérale, Végétale et Animale, Bruxelles (1838)	日本海域研究 第四〇号 (平成二二年)	415
29	壮猶館翻訳方 芝木昌之進と「ハルレー地球万国曆史」について	日本海域研究 第四五号 (平成二六年)	425
30	第二部 稀観書 B		
	稀観書 G. Rijnbouts, Elektrische Stroommen と大野弁吉の電気治療器をめぐって	北陸医史 第三七号 (平成二七年)	177

第三章 最新高等教育

31	石川県専門学校の化学教育	日本海域研究 第三六号 (平成一七年)	439
32	石川県甲種医学校の医学教育 医学教科書と参考書から医学教育を見る	日本海域研究 第四〇号 (平成二二年)	453
33	附録		
	黒川良安の佐久間象山への蘭学の教授	北陸医史 第三七号 (平成二七年)	184
34	成瀬正居「壮猶館御用達留」などに記るされた	北陸医史 第三二号 (平成二三年)	191
35	黒川良安、鹿田謹齋、高峰元桂等の壮猶館での御勤め	北陸医史 第三二号 (平成二二年)	200
	高峰元桂の実像と虚像 高峰讓吉の伝記に見る父親像		



## あとがき

加賀藩は多数の和漢書および洋書を収蔵して「天下の書府」と称されていたが、明治以後百四十七年となるが、この多数の書籍の研究は十分には行われていなかった。その因は書籍が分散して収蔵され、さらに分類も十分に行われていないことにあった。この度の本書は標題として「加賀藩洋書の総合的研究」とした訳はここにあった。

筆者はまず金沢大学附属図書館の書庫で「加州蔵書」の捺印のある書籍の調査を開始して約四十冊の著書を発見した。さらに図書館医学部分館の書庫に入り、古医書の調査とデータの収集を行い大きな成果をえた。たとえば、August Johan Rösel, *De Natuurlyke Historie der Insecten, Haalen en Amsterdam*, (1764-1768) は超稀観書であり、わが国にはこの1セット八冊が、唯一この図書館に架蔵されることが明らかとなった。さらに加賀藩医学館に架蔵された書籍の発掘・調査となり重要な講義資料の発見と繋がった。また、石川県立図書館での「加州蔵書」の書籍の調査を行い、加賀藩壮猶館で購入された Buys, E., 『新修学芸百科事典』全十冊が架蔵されていることが明らかとなった。本書全十冊が揃っている図書館は他に知られず、まさに稀観書であった。

平成二十一年に『加賀藩旧蔵洋書目録』の編集・出版を金沢大学資料館より行ったが、「日本古書通信」(平成二十年六月号)の書物の周囲、特殊文献の紹介、書誌・書目で本目録が「本書は天下の書府が収蔵していた洋書の全容を探る画期的な目録」との講評を頂い

た。本書には八百四十四点の書籍を整理して登録した。さらに藩政期には九百九十八点の書籍があり、そのうちの八百四十四点書籍が現存することが確認された。この内には蘭書が最も多く約50%あり、現在三百九十六点が架蔵されていることが確認された。これは加賀藩蔵書の大きな特徴であった。たとえば Calten, J. N., *Laiddraad bij het Ondericht in de Zee-Artillerie, Medemblik*, (1842) は、大砲書としてわが国での洋式大砲の製造のために頻繁に使用された書籍である。

江戸時代に全国の各藩の購入した洋書数は、幕府が購入したものが最多であり、次いで二位に加賀藩の洋書冊数が上げられる。これらの書籍がどの様に活用されていたかの調査・研究は重要な課題である。加賀藩の場合、西洋医学の導入のために医学書が多く購入されていた。明治四年三月に開校した金沢医学館で、和蘭人医師 P. J. A. Sluys が和蘭語で医学講義を行い、通訳により翻訳され、医学生達はこれを筆記して医学を学習していた。誠に幸いなことに生徒の一人であった藤本純吉によりスロイスの総ての講義がノートに記録されており、これらが総て金沢市立玉川図書館・近世史料館に架蔵されている。長期間にわたりこの講義録は手付かずの状態であった。

著者が論文『加賀藩の火薬・I 及び II』を「金沢大学・日本海域研究」に投稿後に、硝石についての知識を広めるために、近世史料館の図書カードを捲り、「舎密学」を検索した時に、『スロイス口述藤本純吉筆記 舎密学』のカードを見つけた事から、事態は大きく変わった。早速、スロイス舎密学の解説を行った事がその後の筆者と和蘭医学との接点となった。



この舎密学の内容と従来のわが国の化学史との比較により、スロイスは舎密学講義でわが国に最初に最新の近代化学の教育した人物であることが確認された。また「究理学」では、電磁気学の講義を全国に先駆けて行って居た。「動物学」では、この言葉が初めて金沢で作られたことが明らかとなったことは注目された。太田美農里訳『斯魯以斯口述 官許 動物学』（石川県蔵梓）は、わが国最初に標題に「動物学」と記された書籍であった。「植物学」「薬剤学」では有効成分の化学的名称の紹介を行っていた。「生理学」では「ダーウインの進化論」の紹介をわが国で最初に行った。「病理学」では「遺伝学」の紹介が行われていた。

さらにホルトルマンの「有機化学」講義では進んだ内容の講義が行われていた。とくにベンゼンの環状構造の説明は優れたものであった。異性体の構造化学、立体化学、光学活性体の説明、蛋白質および酵素の説明、さらにパストールによる酒石酸の光学活性についての説明が行われ、これらは当時の最新有機化学の講義であった。

これらの講義を受けた第一世代の九人の医学生卒業後は石川県、富山県、福井県に散り、各地区の病院に勤務して、住民の健康と疾病治療に尽力したことは言うまでもない。

明治初期の医学史の研究から新たに浮かびあがったのが、薬学教育の歴史である。金沢医学所では明治九年に薬舗学の教育を最初に始めることになり、二人の生徒がこの学科に入学した。これが当に薬学教育のスタートであった。翌年に学科名が改まり薬学科となった。これが現在の金沢大学薬学部のリーツである。

金沢の高等教育の成り立ち―石川県専門学校、石川県甲種医学校

られる様になるには長い年月が必要であった。明治二十五年頃になつて第四高等学校附属病院の患者数が増加した。

先に明治四年のスロイスの究理学講義から、電磁気学が金沢で初めて講義が行われた事を記した。そして明治十一年二月には、文部省は米国・ボストンのリッチー社より百十点の教育用物理学実験器具よりなる一セットを輸入して、全国の公立師範学校あてに支給して、物理学教育の振興を図った。従来、この事柄は文部省史料に記載されていることは知られていたが、実験器具の現物の存在については不詳であった。

平成十七年刊行の「金沢大学資料館目録3、石川県専門学校物理機器図録、明治十年代の物理学教育と文部省交付物理機器」に、初めてこの物理実験器具の一部が本学に現存していたことを明らかにした。金沢には百十点のうち五十三点が現存しており、この中にRiclie社の刻印が発見されている。およそ百三十年前に交付された物理実験機器―物性学・力学（十一）点・水学（十）点・気学（二十二）点・熱学（十四）点・電気学（十九）点・磁気学（十五）点・光学（九）点・音学（十）点）は、啓明学校、中学師範学校、石川県専門学校、第四高等学校と請け継がれ、現在は金沢大学附属資料館および県立自然史博物館に保存されている。これらの器機はまさに「理科教育発達遺産」に指定して、長く保存することが望まれる。

拙著『加賀藩の火薬』で金沢市涌波町の加賀藩土清水塩硝蔵跡（火薬製造所跡）に触れたが、この遺構が金沢市埋蔵文化財センターにより発掘調査された。その結果、文化庁により塩硝蔵跡は「国指定歴史史跡」となった。近年、幕末明治の産業施設が「産業発達史遺

についての研究も初めて行われたものである。明治四年七月の廃藩置県で金沢県が生まれたが、当時の教育機関であった私塾が教育令により廃止され、まず明治九年二月に石川県啓明学校を金沢・仙石町に開校した。続いて明治十年一月に石川県中学師範学校に校名を改め、さらに明治十四年九月に石川県専門学校となり四年制の学校として、初めての高等教育が始まった。これが後の第四高等学校（明治二十年四月開校）の前身校であった。ナンバースクールと呼ばれたこの中学校は、先ず始めに明治十九年に第四高等学校、次いで第三高等学校の設置が決まった。その後次々と続いたのである。当時北陸では福井、金沢、富山、新潟で、このナンバースクールの誘致合戦が行われていた。これまでに石川県専門学校が存在したことが、この誘致を有利にさせた。石川県専門学校、および第四高等学校からは優れた人材が輩出され、後に中央の政官学界で活躍した人物が多く生まれた。この伝統はその後の第四高等学校に受け継がれたのであった。

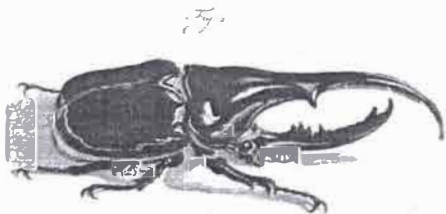
一方、甲種医学校は明治十二年に政府は医学教育制度を改めて、東京大学医学部卒業生を教授としてドイツ医学の教育を行い、卒業生には直ちに医師開業免許を与える制度を発足させた。従来の金沢医学校（田中信吾校長）には明治十三年九月に東大を卒業したばかりの外山林介（内科、産科）が着任した。これがオランダ医学からドイツ医学への移行の始まりであった。これに伴い人事の問題も生じた。その結果、従来のオランダ医学の医師達は明治十七年末に博労町に私立尾山病院を開設して移る事になった。これが石川県での私立病院の始祖となった。ところが、金沢でドイツ医学が受け入れ

産」として世界遺産指定の候補に推薦されている。明治のわが国の科学教育を推進してきた物理学機器も「理科教育発達遺産」に指定されるに値するものであることを強調して、筆を置くことにする。本書に掲載された多数の論文の執筆にあたり、金沢の図書館には大量の江戸時代の古文書が保管されており、それを直接に手にして、二百年余の昔の金沢の姿を目にし、肌を感じる事ができたのは幸甚なことであり、退官後の人生を豊かなものにした。本書が加賀の先人達の努力の結晶を蒐集したものであり、今後の貴重な史料の研究に役立つことを期待する。

尚、本書にはレーゼル著『昆虫の自然史』から数点の昆虫絵図を添付した。これは筆者がかつて虫を追う青年であり、レーゼルに偶然に出会う機会に恵まれたことに由来している。

平成二十七年五月

筆者



SCARABAEORUM TERESTRIUM PRAEF.  
CLASSIS I  
Heracles Beetle, *Dynastes hercules*  
和名 ヘラクレス カブトムシ